

指導マニュアル：類題「多様な『正義』と共生のジレンマ」

～島根県立大学の「思考の型」を基礎から定着させる～

1. 作問の意図と学習目標

この類題は、近年の島根県立大学（国際関係コース）で頻出している**「価値の体系（高坂理論）」「知的な怠惰」「相克（ジレンマ）」「自画像」**という4つのキーワードを、一本の筋道で理解させることを目的としています。難易度を下げていますが、問われている論理構成は過去問（R5～R7）と全く同じです。

2. 設問別・指導の急所

【問1】「知的な怠惰」のメカニズム

- ポイント：「考えないこと」だけでなく、「安易な正解（善玉・悪玉論）に逃げること」が怠惰であると気づかせます。
- 合格へのアドバイス：「相手が悪い」と思うとき、それは自分が「変わらなくて良い（反省しなくて良い）」という免罪符になっている、という筆者の意図を説明させると深みが出ます。

【問2】「相克（ジレンマ）」の構造的な理解

- ポイント：「あちらを立てればこちらが立たぬ」という構造を言語化させます。
- 合格へのアドバイス：単に「難しい」と書くのではなく、「AをすればBが壊れ、BをすればAが崩れる」という、矛盾の両端を具体的に示すレトリックを指導してください。

【問3】「自画像」の概念と知的労働

- ポイント：「自画像の更新＝自己相対化（自分の正義を疑うこと）」であることを理解させます。
- 合格へのアドバイス：
 - NG：「他文化を学んで、仲良くなりたいです」→理想論（知的な怠惰）
 - GOOD：「他者との違いを知ること、自分たちが信じていた『常識』の偏りに気づいた。この気づきをもとに、自分の考えを修正していきたい」→自画像の更新
- 島根県立大学は、「多文化共生＝楽しい・優しい」というイメージではなく、**「多文化共生＝摩擦を管理し続ける苦しい知的労働」**と捉えている点を強調してください。

3. 採点・添削の目安

- 評価A：課題文の理論用語（力・利益・価値など）を、自身の体験に結びつけて定義できている。
- 評価B：課題文の内容は理解できているが、自分自身の体験（問3）が一般的な道徳論にとどまっている。
- 評価C：善悪二元論（相手が悪い、理解し合えば解決する等）に陥り、複雑なジレンマを無視している。

4. 生徒への声掛け

「この問題に『たった一つの正解』はない。大事なのは、答えが出ない問いに対して、君がどれだけ粘り強く、言葉を尽くして『調整』しようとするかだ。その姿勢こそが、島根県立大学が求めているものだよ。」

